

障害学生支援ボランティア実習A

注目授業レポート

広大には、広大にしかない授業やとてもユニークな授業がたくさんあります。このような授業をみなさんにも知ってもらいたい、あわよくば、興味をもたれた読者に授業を受けてもらえればいいと考えて、この企画ができました。実際に授業をうけている飛翔編集委員が授業の内容、魅力をお伝えします。

障害学生支援ボランティア実習A

この授業は一年生から、後期に受けることのできる教養教育の一つです（前期にも同様にボランティア実習Bがあります）。授業を受ける学生が、実際に授業時間中にボランティアをするというもので、一単位もたえます。ただ内容は、一般的なボランティアと異なり、主に障害のある広大生が、障害のない広大生と同じように学べる、学生生活を送れるように、支援活動（就学支援）をします。ボランティアなのに、単位がもらえるの？と考えた方もいるかもしれ

ません。それは次のような考えのためです。支援を必要とする学生も、支援活動を行う学生も、同じ広大生であることに変わりありません。支援を必要とする学生のメリットを考えると同様に、支援活動を行う学生のメリットを考えなければなりません。支援活動を通して、相互に利益があるような仕組みの一つとして、「支援活動に対する単位認定」という方法が取り入れられたのです。もちろんメリットは単位だけではなくありません。実際に支援活動を行うので、障害の内容や就学支援の仕方を現場で学び、経験を積むことができます。また支援の要請がないときは、現在行っている支援方法や今までにない、新たな支援技術を学ぶことができます。こうした学習・経験を通じて、自分に専門以外の新たな視点を与えてくれます。

ボランティア活動室

総合科学部事務棟一階から二階に上がってすぐのところに、ボランティア活動室があります。ここが支援活動の拠点であり、実習の場です。また障害のある学生や、障害のある学生を受け持つ教員が相談に来る場所でもあり、同じ問題に関わる人が集まるため、交流が生まれる場所でもあります。



ボランティア活動室での授業風景

授業時間は最初の第一回のガイダンスで、希望を聞かれ、柔軟に決めることができます。授業は毎日、複数の時限に行われているため、私も自分の空き時間に実習をしています。授業を受けている学生は総合科学部、教育学部、文学部、理学部など、様々な学部で、なかには大学院生の方もいらっしゃいます。一クラス、十人弱で授業を受けています。活動室の壁には支援技術について書かれた大きなパネルが架けられ、壁際にはパソコンなどの情報機器や支援機器が並んでいます。窓からの光と床の

注目授業レポート！

黄色の絨毯で、部屋全体が柔らかく感じました。他の教室に比べ落ち着いた部屋で、話もしやすく、作業もしやすいという印象を受けました。

ある日の授業風景 ～手話～

今期の授業は、人手を要する支援の要請があまりないため、支援方法や障害について学ぶ時間が多く取り入れられています。最初に行うのは、手話の練習です。手話の練習と言っても難しい手話ではなく、簡単な指文字をしています。指文字とは、ひらがな五十音、一文字、一文字を表した手話で、指文字でしりとりをします。一人ずつ、順番に指文字で単語を伝えていきます。私はあまり覚えていないので、何度も指文字の五十音図を見て、手の動きはもちろん、口の形をヒントにして、相手の単語を読み取ります。そして次の人に、単語を伝えていきます。私は指文字で伝えるほうが、指文字を読み取ることより簡単に感じました。耳の不自由な人は慣れているから平気なのだろうか？と疑問がでてきました。



指文字をする実習生

～要約筆記～

次に要約筆記の練習を行います。要約筆記とは、聴覚に障害がある人のために、障害のない人が話を聞いて、その内容を簡潔に書き取り、伝えるというものです。「話を聞き、まとめ、書く」というこの作業は、単純そうですが、かなり難しいです。先生が短めの文を読み、それを実際に要約して書くのですが、私が書いているうちに、話には先に進み、まとめることもできずに、要点も書けずじまい。パソコンのワープロを

使っても、結果は同じで、かなりの練習が必要だと感じました。

～音声字幕の編集～

最後に音声字幕の編集です。この作業は実習時間の中で、大きな割合を占めます。音声字幕とは、広島大学が独自に行っている、最新の技術を用いた支援活動です。簡単にいえば授業をパソコンで録音し、字幕を付けることで、音声・字幕の付いた復習用教材を作ります。この教材によって、聴覚に障害のある学生や語学力に難のある学生だけでなく、障害のない学生など、様々な学生も復習でき、授業の理解が深まります。

音声字幕は、パソコンで授業の声を取り込み、認識し、その場で文字に変換する音声認識ソフトを使います。先生は専用のマイクをつけて話すだけでよく、先生の声をパソコンが認識し、すぐに文字へ変換されていきます。ただ、今の技術力から言って、言葉を百パーセント、正確に認識して、文字に変換することはできません。そのため字幕に間違いや音声を認識できていないところがあり、実習生がパソコンで訂正・加筆していきます。編集の終わった音声字幕は、授業資料とあわせて、インターネット

障害学生支援ボランティア実習A

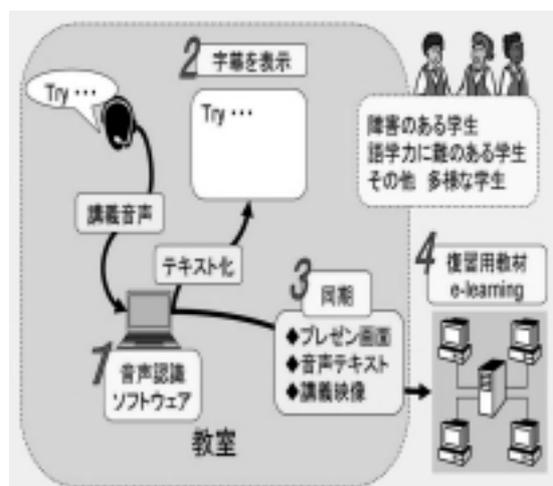


音声字幕編集

上に公開されます。授業を受けている人ならば誰でも、利用できるようになっていきます。この支援方法はまだまだ、実験段階で、数種類の授業で行われている程度ですが、こうした最新の支援方法を学べるのは、この授業の魅力です。また多くの人の役に立つことも良い点で、ボランティア活動室では、障害のある学生だけでなく、すべての学生が学びやすくなるように活動しています。

広島大学では、障害のある学生に就学支援をすることによって、広島大学全体が良くなると考えています。例えば、障害のある学生が授業を受けていると、教員はその学生に伝わるようなわかりやすい授業はどんなものかと考え始めます。すると、障害のある学生だけでなく、障害のない学生にとっても、よりわかりやすい授業ができて、聴覚に障害がある学生のことを考えて、音声字幕復習用教材を作る活動を行っています。この教材は、他の学生も復習に役立っています。このように支援活動を

広島大学・ボランティア活動室の精神



音声認識技術の略図

することで、大学全体がよくなるように考えています。これは、ユニバーサルデザイン（後述）が背景にあります。支援活動を中心にしながらも、多様な人を想定して、誰にとっても使いやすく、便利な環境を作ろうとしています。

その他の活動

すべての活動は説明しきれませんが、名前のみをあげておきます。バリアフリーマップの作成やノート作成、図書館補助や手話講習会や車椅子体験など多数あります。とても他ではできないような体験ができます。

ボランティア実習からの発展

実は、このボランティア実習は単に一つの授業として成立しているものではなく、大きくわけて、五段階からなる「アクセシビリティリーダー」育成のためのプログラムの一部です。そのため、実習で興味をもった人やさらに学びたいという人は、より深く学ぶことができます。

注目授業レポート！

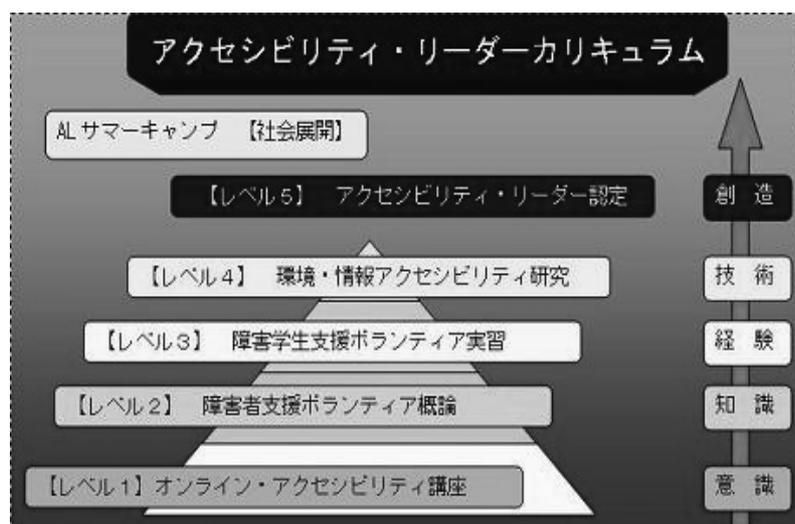
アクセシビリティリーダー

アクセシビリティとは「利用しやすさ」や「使いやすさ」を意味します。障害の有無や身体特性、年齢や言語、文化の違いに関わらず、「情報」や「サービス」、「製品」や「環境」がどれだけ利用しやすく、使いやすいものであるかを考えるときに用いられています。アクセシビリティリーダーは、こうした「誰もが、利便性を享受できる豊かな社会」を創出するための人材と定義されています。五段階のプログラムを受けることで、広島大学から独自に認定されるもので、社会に向け、自分の力をアピールする証となっております。

「アクセシビリティリーダー」

育成プログラム

アクセシビリティに関連する「基礎概念」「バリアの特性」「支援技術の活用」「環境の整備」といった内容を体系的に学びます。プログラムは五段階に分かれており、それぞれ意識、知識、経験、技術、創造というテーマに従って作られています。レベル1はオンライン・アクセシビリティ講座、レベル2は障害者支援ボランティア概論、レベル3が障害学生支援ボランティア実習



A、B、レベル4が環境・情報アクセシビリティ研究、レベル5がアクセシビリティ・リーダー認定試験となっています。アクセシビリティリーダーになると、マイクロソフトと広大が連携して開催するサマーキャンプに参加できます。実際の社会の中でどのような人が必要とされているかが学べ、新技術や将来出てくると期待されている技術の話を聞くことができます。

どうでしたか

このように魅力がいっぱいのボランティア実習です。みなさんに幅広く柔軟な視点をもたらすものではないでしょうか。興味をもたれたら、是非受けてみてください。また、より詳しいことは、以下のホームページを参考にしてみてください。

(担当 18生 荒川 洸一)

ボランティア活動室

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/friends/>

高等教育のユニバーサルデザイン化プロジェクト

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hiuniv/index.html>

上級英語

○ Captain, my Captain!

J. Lauer助教授

「ネイティブのような英語を喋りたい！」

誰もが一度は抱く夢。上級英語は、そんな憧れを形ある目標に変え、1歩近づくことのできる授業です。

TOEFL 520点以上 (CBT 190点以上)、TOEIC 730点以上の英語力を持つ学生に推奨されていますが、スピーキング・リスニング・ライティング・リーディングの4技能の向上を目指す学生が多く受講しています。



授業内容

2006年度後期は、『Dead Poets Society』というアメリカ映画を観ながら（もちろん字幕なし！）それに出てくる単語や表現を勉強しました。生の英語を身につけるのはもちろんのこと、映画のテーマであるメッセージについて考えたり、アメリカの日常を垣間見たり、とても興味深い授業です。中でも、1回目には何が起きているのか分からなかったシーンが、単語を復習し2回目を観ることで分かったときには、特に強く「英語がわかる」嬉しさを感じます。

授業の流れ

授業は、Free Conversationからスタートします。テーマが設けられたり、初対面の人と会話したりと、コミュニケーションの難しさと楽しさを実感する時間です。

続いて、Lauer先生への質問タイム。英語学習に関することから、趣味、近況、ネクタイの柄、政治の問題まで、様々な質問が飛び交います。先生からは、より自然な言い回しにするためのアドバイスやウィットに富んだ回答が返ってきます。学生からの英文法の質問に対して、次回に先生がプリントを用意し説明して下さることもしばしばです。

次は、いよいよ映画へ。

難しい単語のリストを見ながら、発音や例文の練習をします。高校生の日常を描いた映画なので、スラングもしばしば……。そして、映画を観ます。リストにある単語を映画中に聞き取ることができたときは、そのフレーズを繰り返して言うことがポイントです。一度で全部を聞き取り理解することは難しいですが、映像の助けを借り、想像力を働かせながらストーリーを追います。

注目授業レポート！

宿題について

この授業の、もう1つの特色は宿題です。

自分が特にレベルアップをしたい技能を中心に、自分で宿題の内容を決めます。文章を書いたり、単語を覚えたり、本を読んだり、各自が様々な学習内容をノートに記録し、期日に提出します。ノートのページ数が多くなるにつれ達成感が湧いてきます。

また、映画のダイアログをLauer先生が文章とCD-Rの音声にして配布して下さるので、映画の予習・復習や自主学習に様々な角度から取り組むことができます。いくつものメディアを通して繰り返し英文に触れることは、語彙や慣用句を着実に身につけるためにも、とても良い方法です。

授業と宿題の組み合わせで、積極性の分だけ英語力が伸ばせるようになっています。

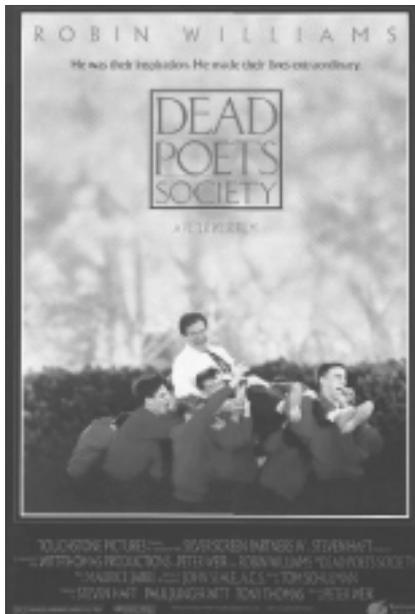
声に出しての練習や会話の多い、にぎやかな授業。

いつもの友達とのいつもの会話なんだけど、使うのは英語。

英語のネイティブスピーカーである先生に、自分の目標に近づくためのアドバイスをもらえる。

洋画を字幕なしで楽しむ第一歩！

上級英語は、普段の英語の授業とは一味違った、*fascinating*（魅力的）な授業です。



有名大学への進学率を誇る名門校を舞台に、この学校の卒業生でもある新任の先生と、ティーンエイジャーたちが繰り広げる物語。先生の風変わりな授業に、生徒は困惑しますが……。

「今を生きる」という邦題も付けられているように、今を大切に人生を楽しむことの大切さが、主人公たちの葛藤を通して伝わってきます。

キーワードは、

Carpe diem!

Suck the marrow out of life!!

(担当 18生 佐師 智郁子)